
ラジオ放送と蓄音機レコードが変えた謡曲の質

—囃子方にシテ方が合わせる時代へ—

飯塚 恵理人

1. はじめに

大正末年にラジオ放送が始まり、それまで会場に出かけて聴くものであった演劇・音楽が、自宅にいながら東京の名人の台詞・演奏を聴くことが出来るようになった。能楽については、それまでは同じ観世流であっても東京の観世流の謡い方と「京観世」と呼ばれる京都の観世流とは謡い方が異なり、宝生流でも東京の宝生流の謡い方と「加賀宝生」と呼ばれる金沢の宝生流では謡い方が異なっていた。これは明治・大正期の新聞や雑誌記事から読み取れる。しかしラジオ放送の開始あたりから各流儀内での謡い方の統一が進むようになる。

この変化はもともと明治30年代以降、東京・京都などの名人の謡を録音した蓄音機レコードを「謡曲の教材見本」として販売・普及させたことが胎動となっている。能楽師に直接教えてもらう稽古が、蓄音機レコードというメディアを用いた一人稽古へ代わることは、「好きな時に、好きな能楽師の謡を教わる」という教えてもらう側の都合に合わせた稽古を可能にした。ラジオ放送はそれに拍車をかけ、前記のように東京の名人が地方でももてはやされ、明治・大正期に全国で整備された鉄道網を用いて東京在住の能楽師が地方に来て出張稽古をしたり、地方で公演を行うようになっていく。公演の記念として後援者の素封家に能楽師のプロマイド写真やレコードを「献呈」す

ることもあった。こうしてラジオ放送によって届けられる東京の家元や名人の声を、全国の愛好家が身分・財産・東京からの距離などに関係なく自由に聴けるようになり、東京の家元や名人をさらに地方へ進出させ、それが地元固有の謡い方を徐々に改めて行き、各流儀内での謡い方は統一へ向かった。レコード・ラジオというマスメディアが謡という「伝統芸能」に大きな影響を与えた顕著な一例である。

2. 辻山幸一氏SPレコードコレクションと氏の談話

筆者が代表をつとめる「メディアと古典芸能研究会」では「放送がどのように芸能・音楽の担い手や芸の質を変えてきたのか」を「蓄音機レコード」や放送台本などの放送資料の収集・整理とデジタル化から明らかにすること、能楽・歌舞伎・文楽など成立時期も愛好者層も異なる芸能が、「日本の古典芸能」というジャンルを形作り、「日本文化」の代表としてユネスコの無形文化遺産に登録されるに至った過程を明らかにすることを目標としている。蓄音機レコード（SPレコード）の音源は、放送開始以前の明治30年代からテレビ放送開始後の昭和30年代前半まで約80年に亘る音楽・芸能の一次資料である。特に「メディアと古典芸能研究会」では関西のSPレコードコレクターで古典芸能レコードの良質なコレクションをお持ちの辻山幸一氏の御協力を頂き、御所蔵のコレクションのデジタル化をさせて頂いている。辻

辻山氏のレコードコレクションは多ジャンルに亘り、今後もデジタル化を継続させて頂きたいと願っている。

辻山幸一氏からはこのたび、氏のレコードコレクションについての談話を得ることが出来た。以下にそれを挙げる。辻山氏は昭和10年生まれであり、レコード収集を始められ、神戸の古物のレコード市で購入されていたのは昭和20年代後半から30年代までくらいのこと、LPレコードが普及する以前のことである。当時の古レコードの売買取引の様子、それに関わった人々や店の名前が分かり、非常に興味深く貴重な談話である。

昭和20年代後半、JR神戸駅高架下の南側の、今道路になっているところに古レコード屋があった。高校時代に誕生祝として、地震加藤・河内山宗俊などのレコードを買ってもらったのが最初だった。BKの音源の安原せんぞうのコレクションに協力した「センコウ堂」という元町の高架下の古レコード屋を紹介してもらった。その二階には膨大な量のレコードが積まれていた。浪花節が多かったが、浪花節を集めだしたら予算も場所もなくなってしまふので、自分の興味のある歌舞伎と邦楽のレコードをそこから抜き出して、購入した。SPレコードは重いのでだいたい買う量を決めて「ツッコミでこれだけ」というような値段設定でまとめて買っていた。「はい20枚」とか。謡曲だけは少し高かった。高校時代から大学・サラリーマンになった頃までセンコウ堂で買うことが多かった。今も名前は残っているかも知れない。その後は「レコードコレクターズ」という中村とうようが編集していた雑誌を頼りに店を探すこともあった。神戸・大阪・京都、行けるところの古道具屋はまめに回って、めぼしい物を集めた。神戸の古物の市にはお茶道具のような高級品の市と、そうではない何でも扱う市と二つがあっ

たが、古レコードは何でも扱う方の市に出ている。レコードが出るのを安原さんは人を派遣して何でも落としていた。安原さんが落とさなかった物のなかにも良いレコードがあった。京都の古道具屋は割合整理して売っていたが、大阪の電気街の日本橋百貨店という屋根があるけど道路まで地べたに拡げて売っているようなところでもかなり購入した。値段も質もバラバラだったが、だから面白かった。ニッポノホンなどをマザーにして作る海賊版のレコードもあり、音はひどく悪かったがこのような海賊版は古レコード屋にもかなり多かったのもので、需要はあったのだと思う。

(筆者注：「安原せんぞう」は安原仙三。独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所所蔵の「安原コレクション」は義太夫などのSPレコードコレクションで有名。「ことに、1960(昭和35)年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションは、明治・大正・昭和3代にわたって発売された各種邦楽のSPレコードを網羅した約6,000枚の一大コレクションで、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。」(東京文化財研究所資料 www.tobunken.go.jp/~joho/japanese/publication/nenpo/.../2008_6.pdfより抜粋))

3. デジタル化された辻山コレクションSPレコードを聴く

放送文化基金の助成を得て、辻山氏レコードコレクションは平成27年夏時点ではほぼ70%がデジタル化された。その成果を広く公開すると共に、当時の音源を聴いた方々から特に現在の演奏と比較してどうであるかとの意見を求めるため、2015年8月20日、共同研究者の大山範子先生の御幹旋により神戸女子大学教育センターを会場に「メディアと古典芸能研究会 第一回公開研究会『辻

山コレクションを聴く ～謡曲レコード編～』を開催した。タイトルの通り第一回は能楽を対象とした。

会では10の音源をデジタル化したものを参加者に聞いてもらい、感想を口頭で求めた。以下に使用音源リストと、当日の録音から筆者が重要と思う意見を抜粋した。これらの音源についてはすべて著作権が消滅しているので椋山女学園大学飯塚研究室ホームページ内「辻山幸一コレクション謡曲」(<http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/tujiyoukyoku1.html>)で公開している。またこの質疑応答の録音も筆者の研究室で保存するほか、神戸女子大学古典芸能研究センターに大山範子先生を通じ提供したので、研究者の方々は筆者か、神戸女子大学古典芸能研究センター大山範子先生まで問合せ頂ければ試聴することが出来る。

[研究会使用音源リスト]

曲名は会場で試聴した順に挙げた。

各冒頭は、

- I 曲のデジタルデータを前述のホームページ「辻山幸一コレクション 謡曲」で公開している際の対応音源番号
- II 曲名と演者名
- III レコード会社名・型番
- IV その他レコードについてのコメント

である。この後に「会場からの声」として会場内の感想・意見を箇条書きにした。簡易な録音機器を用いた録音からの活字化であったため、不明瞭で誰の声か特定できない複数のコメントを筆者が一部まとめて掲載したところがある。

- ①No. 73 能楽囃子 A面「楽」/B面「男舞・序の舞」 笛：野口伝之輔 小鼓：大倉長十郎 大鼓：山本敬一郎 太鼓：三島太郎

私家版。稽古用に吹き込んだもの。電機吹込。
(会場からの声)

- ・テンポはちょっとゆっくりめ。
- ・これで舞うことが出来る。現在とそんなに変わらない。笛は現在の野口亮の笛とよく似ている。森田流の中でも装飾音をあまり使わないシンプルな音色である。電気吹き込みであること、大倉長十郎が参加しているのも戦後から昭和30年代初頭に作られたレコードである可能性が高い。

- ②No. 72 「弱法師」 観世元義 オリエント 1145A

「草子洗小町」同 オリエント 1145B
観世元義は片山春子と結婚していたが大正4年に離別して観世元義を名乗る。大正9年没。

(会場からの声)

- ・囃子に関係なくたつぷりと謡っている。「今は囃子に支配されてしまっている」という声も聞かれた。

- ③No. 71 「杜若・上」 梅若六郎 (二世実か?)
コロンビア NE33742

「杜若・下」同 コロンビア NE33743
一時間くらいの「杜若」の一部。

(会場からの声)

- ・軽めで今と上げ方とか、引き方とか少し違っているが、演奏として聴いていて楽しい。

- ④No. 64 「杜若」 梅若万三郎 (二世か?) ニッポンノホン 1500

「弱法師」同 ニッポンノホン 1501

(会場からの声)

- ・「杜若」は声の調子が高い。

- ⑤No. 63 「小袖曾我」 片山九郎三郎・橋岡久太郎 ニッポンノホン 1454

(会場からの声)

- ・今の演奏と比較して、上げ方や引き方が今と少し違うけど違和感はない。

- ⑥No. 77 一調「松虫・上」 曾和修吉 (井上嘉一郎) オリエント 2689A

「松虫・下」同 オリエント 2689B

(会場からの声)

- ・謡主導で小鼓がそれに合わせている感じ。現在ならばこういう謡い方も打ち方もしないと思われる。
- ・井上嘉一郎は後に「嘉助」と改名するが、嘉一郎時代に京観世の謡い方を東京の観世元滋（左近）の謡い方に改めたと言われている。

⑦No. 76 「羽衣・上」謡：井上嘉一郎 笛：杉市太郎 小鼓：竹村竜之助 大鼓：谷口喜三郎 太鼓：前川光隆 オリエン
ト 2113A

「羽衣・下」同 オリエン 2113B

(会場からの声)

- ・危うい演奏。謡主導。全体としてどこかで合えば良いという発想。今ならば囃子に外れたら恥という意識があるし、聴く側でも外れたことを間違いと考えるが、この時代には謡を大事にして大小がそれに合わせていく。トータルの演奏としてはかえって良い感じかも知れない。

⑧No. 70 「靉猿 1」茂山千五郎（大名）・茂山眞一（猿引） 頒布会 1868

「靉猿 2」同 頒布会 8682

(会場からの声)

- ・「靉猿 1」は「月と狂言師」の茂山千五郎（二世千作）の声だろうか？「靉猿 2」の小猿役が政治（？）とあるのは茂山千之丞（幼名：政次）のことか？
- ・昔は能の催しに休憩時間がなかったため、狂言になると手洗いに立ったり食事に行く人が多かった。平成10年頃の旧金剛能楽堂でも狂言になるとトイレの側の声が騒がしいというクレームがあった。今は狂言をきちんと観る良い時代になった。このレコードは今の茂山家に通じる軽みがあって楽しい「靉猿」だったことが偲ばれる。

⑨No. 79 「葵上」生一左兵衛 ニットー 2946A

「砧」同 ニットー 2946B

(会場からの声)

- ・「生一派宗家」とレコードのラベルに書かれて

いるが、現在と異なり、流儀内で玄人弟子を持ち、劇団を持つ人を一般的に「宗家」と認識していた可能性がある。

⑩No. 82 「三輪」謡：大西閑雪 笛：森田 大鼓：谷 小鼓：荒木 太鼓：佐々木 ピク
ター 11126 片面

片面盤であることから明治30年代の録音ではないかと考えられる。

(会場からの声)

- ・シテ謡の「ちはやぶる」が五度に変化する。現在の宝生流の謡には五度の変化があるが観世流にはない。京観世の謡い方が残っている録音として貴重な録音と思われる。

4. まとめ

能楽は明治から戦後の昭和30年代前半までに、大鼓や小鼓が謡に合わせているという形式から徐々に囃子に合わせて謡が謡う形に変化していく傾向があったように思われる。その過程を検証するために、SPレコード音源をデジタル化して研究会の形で多くの方々に聴いて頂き、その傾向を実証できた。ただしこのような変化は一度に起こったものではなく、個人差・地域差・流儀の差も大きいと考えられる。

放送・蓄音機レコードによる芸の質の変化は歌舞伎・長唄・清元など他の邦楽でも起こっていると考えられる。今後も蓄音機レコード・放送音源の収集・整理・デジタル化を継続し、音源という「一次資料」から近代の古典芸能の変化について考察して行きたい。

補記

貴重なレコードを御提供下さいました辻山幸一先生、会の開催に当たってお世話になりました大山範子先生並びに神戸女子大学古典芸能センターの皆様へ感謝致します。本稿は平成26年度放送

文化基金助成及び椋山女学園大学人間学研究センタープロジェクト「日本・アジア文化と人間」の飯塚担当分成果の一部となります。記して感謝申し上げます。

いづか・えりと/文化情報学部教授
E-mail : erito@sugiyama-u.ac.jp